

# 石器石材分析による遺跡評価の試み —瀬底島アンチの上貝塚における人の営み—

An Attempt of Site Evaluation by Analyzing Stone Materials  
- Human Activity at the Sesokojima-Anchinoue Shellmound Site -

大堀 皓平  
OHORI, Kohei

---

ABSTRACT : To evaluate individual characteristics of each site is an important issue about the studies of prehistoric Okinawa. The excavation of the Sesokojima-Anchinoue shellmound site offered ideal date enough to deal with this issue in the aspect of stone materials. In this paper I try a couple of new research methods to attain useful date from these raw stone materials, and I reveal that the Anchinoue shellmound site played a major role in the exchange of raw stone materials at that time. In addition, I try to reconstruct a social situation in the prehistoric Okinawa main island and the neighboring islands, in the perspective of the transformation of landscape around the Anchinoue shellmound site.

---

## 1. はじめに

調査された遺跡は、ただ事実記載された報告書が刊行されるのみでは満足なものではないだろう。その遺跡が存在する地域ないし時代の中であってどのような役割を担ったのかを分析・評価してはじめてその価値が見出される。しかしこのような視点を加味して評価された遺跡は県内では際立って少ない印象がある。新里貴之は貝塚時代後期（弥生時代相当期）の遺跡に対し、弥生系遺物の出土を交易活動による富の集中と捉えることで、拠点集落という評価を与えた（新里 2001）。この仮説は沖縄の先史研究において、筆者の知る限りではじめて本格的に遺跡の評価について論じたものであり、該期社会に迫る意義深い内容であった。また新里は久米島町ウルル貝塚表採石器を取り上げながら、今後の課題として石器石材の重要性を高く評価し、先史時代の物流ネットワーク推定の重要な資料となり得るとも述べている（新里 2003）。ともに該期社会を素描する上で不可避な論点であり、高く評価される。これら新里の提言に対しては調査・報告において意識的に遺跡を評価し、それを蓄積していくことで検証がなされるべきであるが、管見の限りこれに應える意見が提示されていないのが現状である。

筆者はアンチの上貝塚出土の石器資料の整理を分掌する機会を得た。そこで上記のような問題意識をもって遺跡のもつ性格を評価するため、これまで当センターで行われてこなかった幾つかの分析方法を試みた。本稿はこの整理作業で行った幾つかの方法を紹介するものである。またその成果に対し石器石材獲得消費戦略、変形論（コア・リダクション）、景観、変化といった諸概念を中範囲理論に据え、アンチの上貝塚を舞台とした人間の活動について復元を試みた。

## 2. アンチの上貝塚の概要

アンチの上貝塚は沖縄県本部町瀬底島に所在する。瀬底島は本部半島から西に 630 m 隔てた離島で、総面積 2.99 m<sup>2</sup>、標高の最高点 7.6 m の隆起サンゴ島である。いわゆる低い島である。地質はほぼ第 4 紀琉球石灰岩に覆われ、島中央部の標高最高点付近で若干古生代石灰岩が認められる。そのため、後述するように

遺跡出土の石材はほとんど島外からの搬入であることが明らかである（図1）。遺跡は瀬底島東岸の海岸から一段高い段丘上に立地し、後背には石灰岩丘陵、前面はやや小さい海外砂丘が広がる。前面には本部半島が望めるが、その間には海峡が形成されて強い海流を生み、海岸砂丘前面のサンゴ礁は発達が弱い（写真1）。段丘上の立地であるため見晴らしはよく、南北に海を望むことができ、サンゴ礁の発達が弱いことで港湾としては良好な場所である。近年建設された瀬底大橋によって景観は大きく変化したが、それ以前は当時の古環境と概ね大きな違いはないようである。貝塚時代後期前半においては礁内の海産資源への依存度が高いことを背景に発達したサンゴ礁を前面とした海岸砂丘上に遺跡が立地するのが通常である。それを考慮するとアンチの上貝塚は特異な立地であるといえる。

遺跡の時期的には出土土器より縄文時代後期から貝塚時代後期前半（弥生～古墳時代頃）の遺跡で、特に尖底土器が主体の貝塚時代後期前半にピークをもつ。沖縄県立埋蔵文化財センターによって、2002年度に第Ⅰ期調査、さらに2006・7年度の第Ⅱ期の2期にわたって調査が行われた。調査範囲は合計633㎡で、遺跡範囲の全面を調査したとされている（図2）。第Ⅰ期調査ではイモガイ科の集積が4基、敲石磨石集積が1基検出されている。さらに第Ⅱ期調査ではフィッシャー内に廃棄物を投棄し続けることで小貝塚が形成されている特徴的な遺物出土状況が確認されている。また特筆すべき出土遺物には弥生土器・碧玉製管玉が挙げられる。これらの性格からみると、前述の新里の論でいう拠点集落の要素をもちつつも全体的に小規模で廃棄場の様相をもつという、相対する性格を共有する遺跡である。

### 3. 出土石器の分析

言うまでもないことであるが、石器の抜き出し作業や所見・評価は、事実記載を心がけていても担当者の経験や癖、どのような作業を行ったかが少なからず反映され、客観性が保証されるものではない。そこでアンチの上貝塚で出土した石器群を見る前に、どのような整理作業を行ったか紹介したい。なお第Ⅱ期調査出土石器の整理作業では、先述のようにこれまで沖縄県立埋蔵文化財センターでは行われなかった幾つかの方



図1 遺跡周辺の地質（片桐ほか編 2009）

法を試みた。これは前述のような遺跡の更なる評価のためと、少しでも多くの情報を提示するためである。

#### ①用語の整理

まず「石器」という用語についてだが、これには岩石に人為的な痕跡のみられる岩石の全てを指す広義の意味での石器と、道具に加工された狭義の意味での石器とに分かれる(加藤・鶴丸 1991)。当センターでは後者に対して「石器」とし、それ以外の礫(原石)を「石材」と区分してきた。しかしこの従来通りの用語では、石器抜き出しの際に多く認められた粗割片やフレイクを「石材」とすることになり、ここに従来からの用語の再整理が必要となった。そこで今次報告では、道具にまで加工されたものを「ツール」とし、「石材」は全く加工痕跡のみられない礫を指すこととした。そして「石器」はツールを含む人為的な痕跡を残す全資料を指す、広義な意味をもつ用語と捉えた。ただし報告文ではこれまで用いられてこなかった用語を使うことで混乱をきたすとの懸念から、節題は従来通りの用語を用い、文章内で新たな用語を用いることとなった。

しかし後述のように、従来通りツールのみを抜き出して「石器」として報告するのは、フレイクやコアのもつリダクション解明のための情報を疎かにすることになりかねない。今後は報告すべき「石器」をどの範囲にすべきか議論が必要である。

#### ②石器の抜き出しと実測図

以前から指摘されているが、沖縄の剥片石器は本州にみられるほど定型的でなく、ラフな製作のことが多い。アンチの上貝塚においてもその範疇のものが多数を占めており、これをツールと認識し得るか、またツールとしても個別の器種に当てはめられるのか、大いに悩むものであった。そのため、今次の



写真1 アンチの上貝塚周辺の空撮写真

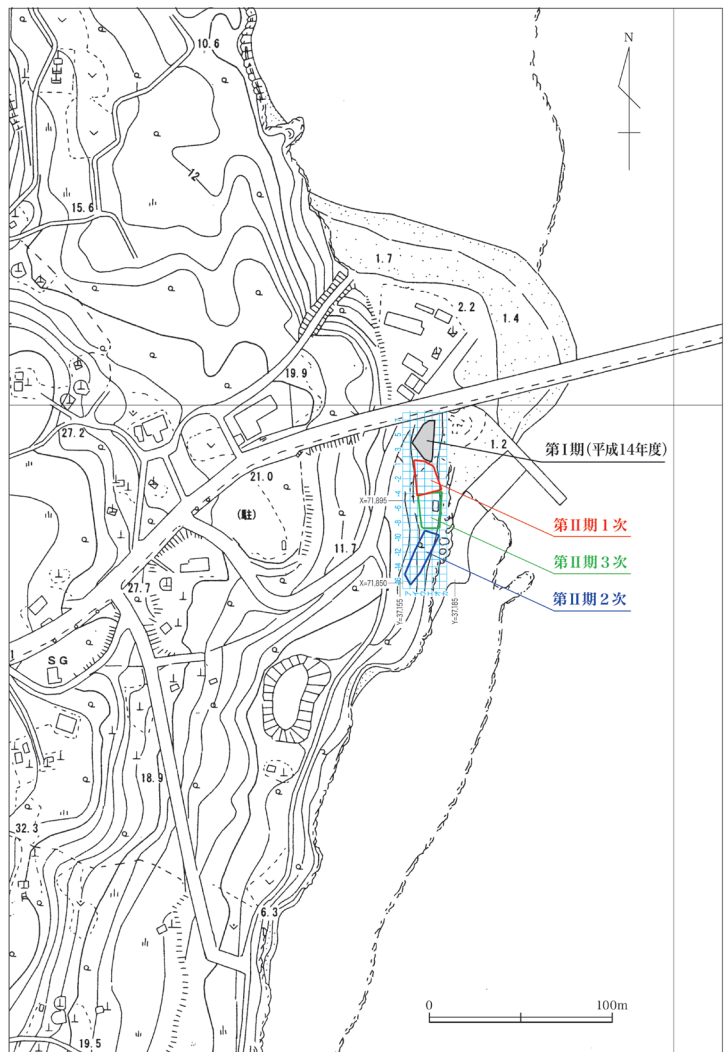


図2 調査区位置図(片桐ほか編 2009)



報告では僅かでも人為的な痕跡と見なし得る箇所が認められるものは全てツールとして認識した。

県内の報告書では、石器、特に剥片石器の実測図の描写について明確な規則があるわけではないようだが、少なくとも当センターでは本土では一般的であったリング・フィッシャーの抜けた実測図であった。しかし上記にあるように抜き出された石器の中には偽石器の可能性のあるものも含まれるので、特に意識して後日第三者によって再検証が可能な図を用意する必要があった。また①に指摘したように、出土したツールの剥離工程などのリダクションの痕跡を少しでも多く図示する必要があり、これまでの実測図ではそれが果たせないのは明らかであった。そこで今次報告の実測図は既刊のマニュアルを参考に（加藤・鶴丸 1991、田中 2004）、リング・フィッシャーや自然面の描写を入念に行った(図3)。自然面と加工面との明確な描き分け、剥離面同士の新旧関係や敲打痕・研磨痕の新旧関係など、加工の痕跡が図示された実測図となった。

### ③フローテーション

これは筆者の提案した作業ではないが、小貝塚の埋土を回収し、ウォーターフローテーションによって微細な遺物の抜き出しを行った。この作業によって微細な石器も多数得られ、従来取り上げられなかった小形のフレイクやチップが多数得られた。この作業の重要性は小田静夫が指摘するところであるが（小田 2000）、碧玉製管玉が土壌サンプル中より得られたことは、フローテーション作業の重要性が再確認されるエピソードとなった。フローテーションを行うことで、従来見逃していた石鏃や黒曜石剥片・チップなどの小型石器も得られる可能性があり、今後不可欠の作業といえよう。

### ④石器の全点鑑定

当センターでは、従来ツールに限定して岩石学的鑑定を依頼し、同定を行ってきた。この作業でツールに用いられる石材については十分なデータが得られる。しかし遺跡にどれだけの種類の石材をどれ程の量持ち込み、それらのうちどの石材が石器素材に選択されてきたのか、この答えを得るためにはツールを含めた出土礫の全点鑑定が必要であった。ただし、遺跡内において調査者が回収する石材を取捨選択してしまえば、その時点で遺跡内に持ち込まれた全石材とはいえない上、調査者の力量に大きく左右されてしまう。その点で出土礫を全点取り上げ、さらにフローテーションで微細石器まで回収した今次アンチの上貝塚調査

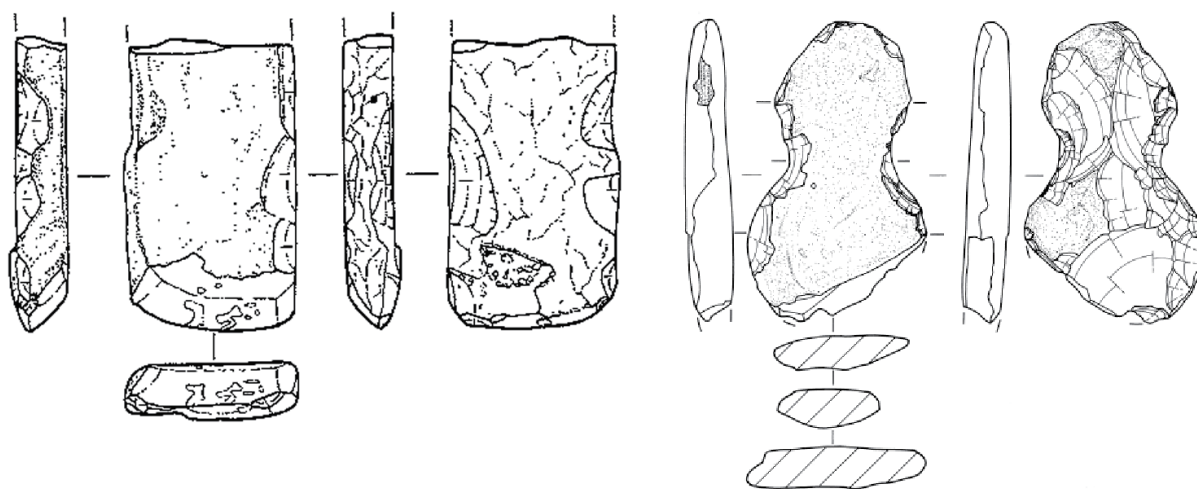


図3 変更された実測図

左：第1次アンチの上貝塚出土磨製石斧（盛本ほか編 2005）

右：第2・3次アンチの上貝塚出土打製石斧（片桐ほか編 2009）



は、この作業を行う上で理想的であった。

今次調査で回収された礫はツールを含めて 1,822 点にも及ぶ。これらを神谷厚昭氏に無理を言って鑑定して頂き、この作業は丸 3 日に及んだ。しかしこの作業の結果、後述するように久米島や渡名喜島に産出する石材、そして県内では産出しない安山岩、長崎県松浦近辺産と想定される玄武岩質溶岩礫が確認された。

琉球列島のような島嶼環境では、遺跡に搬入される石材が在地であるか遠隔地ないし外来であるかの判断が容易であり、このような分析・研究には適した条件をもっている。今次調査のような成果も期待されるため、可能な限り全点分析を行うべきだろう。

#### ⑤ ツール外石器の全点観察及び組成比の統計作業

全点分析により出土した岩石は 40 種類にも及ぶことが分かった。しかしそのうちツールにまで加工され使用・廃棄された石材は両期調査を合わせて 16 種で、多くの石材が石器に加工されることもなく廃棄されたことが分かった。そこで選択されなかった石材にはどのような作業が行われた結果廃棄されたのかを検討するため、これらを 1 点ずつ観察していった。この作業では礫を原石、半割、粗割、粗割片、フレイク、チップ、ツールに分類していった<sup>1)</sup>。この作業には 2 カ月もの時間を要した。

しかしこの作業の成果は大きく、遠隔地石材や琉球列島外の石材であっても近在の石材と同様に半割・粗割・粗割片といった粗加工段階で廃棄されたものが最多であること、同じ岩石でもツールまで加工される礫とは石質が異なることが理解された。③、④の成果の重要性から「石器」とは別に「石器石材」という項目も用意し、紙幅を多く割いて報告した。しかし半割・粗割や粗割と粗割片の識別の意義に疑問点を残しており、方法には改善点も多いと思われる。

#### ⑥ 接合作業

報告書にも課題として挙げた作業であるが、石材搬入からツールに至るまでの石器製作工程の復元、またどの工程がアンチの上貝塚において行われたのかという石器製作上での場の機能の把握という 2 つの課題に対し、最も有効な作業が接合作業である<sup>2)</sup>。この作業は報告書寄稿後の 2 週間に限られたため、遠隔地石材とチャートに限定した。その作業内容と結果については後に詳述するが、結果としてチャートの粗割片同士の接合資料が 5 点得られた（写真 2）。

### 4. アンチの上貝塚の石器・石器石材

以上のような整理事業を行った結果、第Ⅰ期から第Ⅱ期までで出土したツールは石核を除いて 92 点である。まず石器の出土状況であるが、唯一の例外である敲石磨石集積を除いて集中的に出土する箇所はみられず、包含層中に散布していた。小貝塚内からも多く出土しているが、特定の器種や石材が集中するような小貝塚は認められない。他の遺物と同様に廃棄されたとみられる。また接合作業によって得られた接合資料は、異なる小貝塚で出土したものが接合したものであった。土器の年代差もみられないため小貝塚に考古学的な時間差は認められない。続いて器種ごとに石器をみてみたい。まず剥片石器であるが、この中には石鏃の未製品と思われるもの、石錐、RF がみられた。これらはいずれも節理面の発達が少ないチャートを素材としており、それを順序が不規則な押圧剥離によって調整されている。このような簡素な剥片石器製作は曾畑式土器の段階から奄美・沖縄本島諸島でみられる。貝塚時代後期にはあまり報告事例はないが、実際は恒常的に使用されていたと思われる。一部には例外的な規則的剥離によって製作される石匙や打製石鏃があることから、この差異によって在地で製作されたものか九州島から製品搬入されたものかを区別することが可能ではないかと筆者は考えている。チャートを素材としたツールはこのような剥片石器類より石核の方が

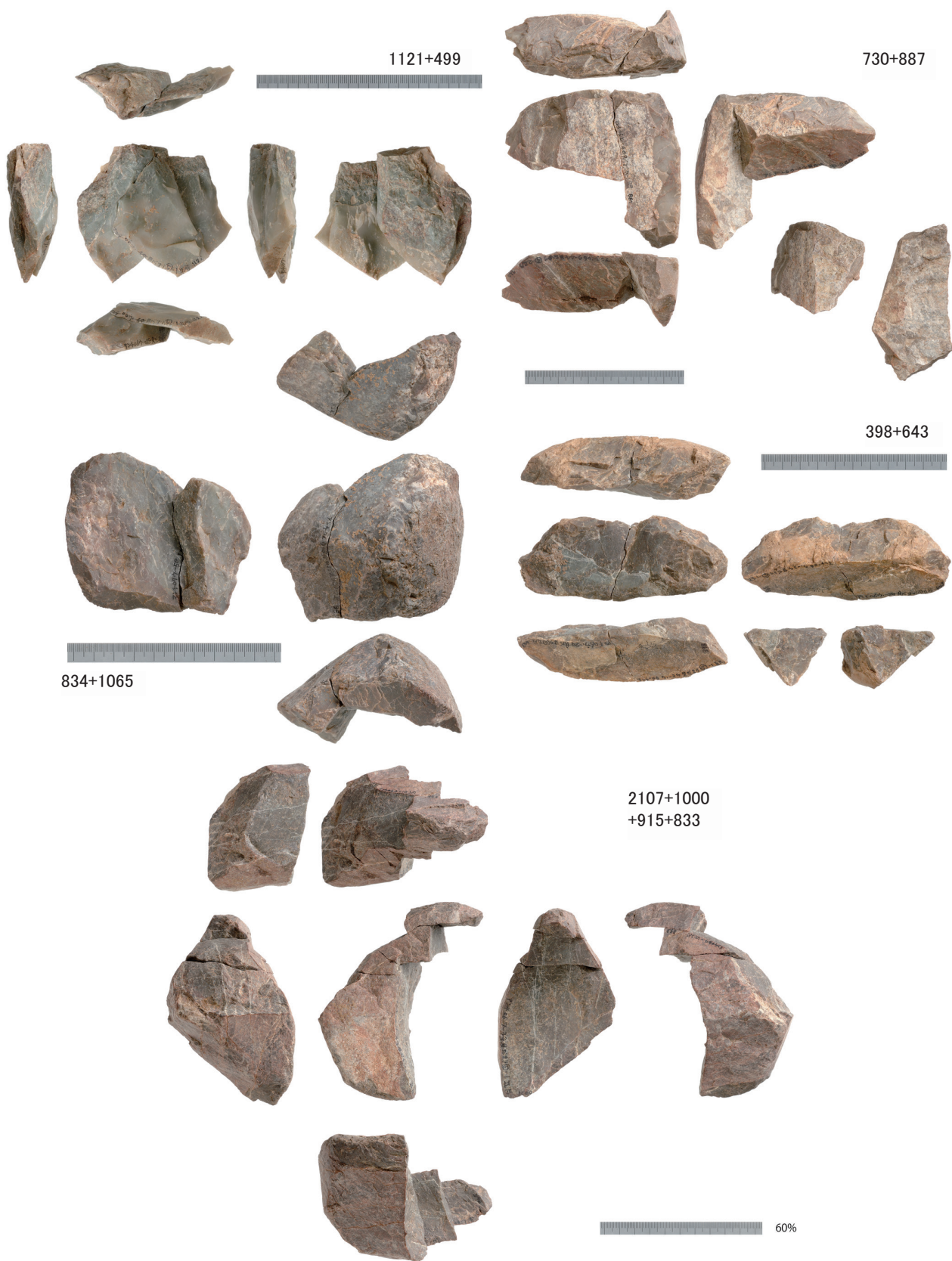


写真2 第Ⅱ期アンチの上貝塚接合資料  
数字は遺物番号 順不同

多い。石核は第Ⅱ期報告において多数見出されたが、これは担当者の違いによるとみられる。平坦な自然面を打面とし、前後左右から直接打撃によって剥片が作出されている。これに対応するようなフレイクも僅かに出土しており、打面が残る一部のフレイクは自然面を打面としているものが多かった。なおアンチの上貝塚では石核に比べてフレイクの数量が極めて少ない。これは作出されたフレイクが遺跡外に持ち出された可能性を示唆している。この認識は後述する遺跡の評価に大きく関わっている。

打製石斧は2点認められている。1点は頁岩を利用した分銅型打製石斧、もう1点はチャートを利用した打製石斧である。本来刺突具や刃物に用いられるチャートであるが、チャート原産地周辺に位置する本部半島や伊是名島・伊平屋島ではしばしばチャートが敲石に用いられる辞令がある。この打製石斧もそれと同じ文脈に位置付けられよう。磨製石斧は12点出土している。石材には変斑レイ岩・緑色片岩・緑色岩・変輝緑岩・変質安山岩・砂岩と多様な素材が用いられ、さらにシャコガイ科貝殻を利用した貝斧も1点みられる。該期になると点数の減少や粗製中心になることが理解されているが（大堀 2008）、それでもメンテナンスを繰り返しながら使用されるため、該期にも遺跡中に1・2点は鋭利な刃部を残す製品がみられる場合が多い。この遺跡の磨製石斧も粗製ばかりであったが、両調査を通じて完形は3点のみで、ほとんど損耗したものばかりであった。このことから出土石器が使用後に廃棄されたものであることを窺わせる。敲石磨石類はいわゆる石鱗状で、表裏面に研磨面がみられ周囲と表裏中央部に敲打痕の残る典型的な複合的機能をもったものである。中粒砂岩を石材にしたものがほとんどである。

石器組成は敲石磨石類が中心で、利用される石材も敲石磨石素材である砂岩が主体となっている。このような石器群のあり方は貝塚時代後期前半の典型的な特徴といえるが（大堀 2006）、チャート製剥片石器が多いのはこれまで該期では認められなかった。ただし出土土器は縄文土器から貝塚時代後期土器までが同一層・小貝塚から出土している。打製石鏃の未製品などは縄文時代の石器である可能性が高い。

他方、この遺跡の調査ではツール以外の礫についても全点が取り上げられている。人為的な取捨選択という網の目を通ることなく「平等」に取り上げられているという好条件から、整理作業ではツール以外の礫を含めた石材の全点鑑定を行った。その結果は表にみられるように（表1）、ツールは僅かでほとんどが粗割された破片であることが分かる。また石材組成をみると、ツールにみられる石材組成と大きく異なり、チャートが最も多く閉める石材であることやツールにはほとんど用いられない古生代石灰岩の大量搬入、遠く久米島・慶良間諸島・渡名喜島やさらには九州からも安山岩や玄武岩質溶岩が搬入されていたことが認められた。またこれら礫は自然礫以上に粗割されたものが多くを占めることが認められたのである。よって、第Ⅱ期調査範囲だけでも1,822点、総重量約314kgの石材が、僅かなツールとともに搬入されていたのである。

## 5. 石器石材の産地と搬入形態

具体的な石材について述べる前に、まずは考古学的な石器石材の分類について考えてみたい。従来、石器石材の表記や分類は、基本的に地質学者に鑑定・指導を仰いでいる。しかし実際には肉眼同定という制約や変成作用の評価などから学者間でも一致しないことがあり、岩石学的な分類を用いることが必ずしも客観性を証明することにはならない。また遺跡によっては多数の岩石名が列記されて把握が困難になる場合が多い上、集成していくと多種に上ってしまい扱いに困ることも多い。沖縄本島の場合は現在84種にも上る。地質学的な石材同定は、石材産地の推定から活動域や交易などを考察する上で参照となるだろう。しかし同一の岩石であっても石質には大小の差異があり、当時の人間は岩石を現代的な同定で選択していたわけではなく、色・光沢感・割った感触などの五感によって選んでいたはずである。従って遺跡に持ち込まれた石材を余すことなく提示するには効果的であるが、石器製作の素材として考える際には岩石学的な分類を考古学的にア



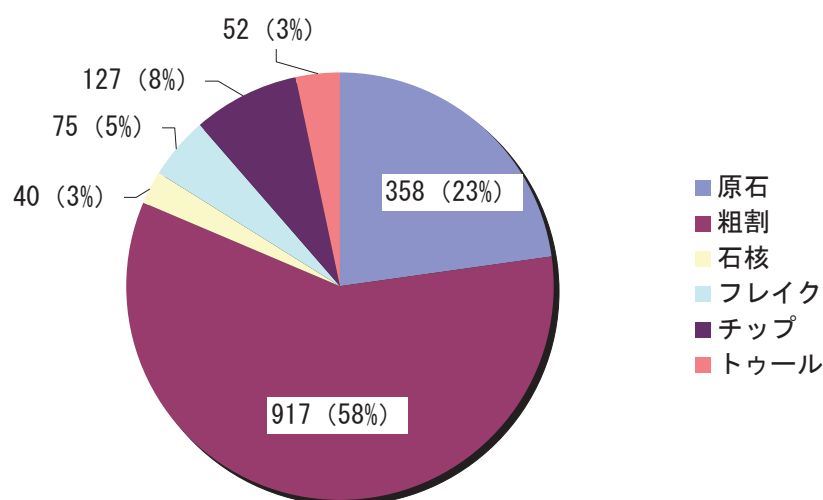


表1 第Ⅱ期調査出土石器・石材の内訳

レンジする必要がある。前者に基づく分析は「事実記載」を旨とする報告書において行ったので、本稿ではより考古学寄りの後者の方法で考察してみたい。そこで今回は石質と産地から石器石材の分類を試みた<sup>3)</sup>。まず石質Ⅰを緑色岩系、斑レイ岩、蛇紋岩といった硬質で粗粒、粘性がある岩石とした。石質Ⅱは頁岩系、千枚岩・片岩・片状岩など、細粒で粘性があり、剥離しやすい岩石とした。石質Ⅲは硬質で粗粒だが、粘性がない岩石とし、中粒・硬砂岩系、砂質系岩、安山岩などが該当する。石質Ⅳは硬質で細粒、珪質分をもつ岩石とし、珪質泥岩、珪質頁岩、粘板岩、チャート、ガラス質安山岩、黒曜石などが当たる。石質Ⅴは軟質な岩石で、泥岩、凝灰岩、サンゴ石、軽石などが該当する。また石質Ⅵにはヒスイや玉・蠟石といった鉱物的な岩石とした。一方産地からの分類は拙稿で分類案を提示している（大堀 2006）。琉球列島外に産地をもつものとして F 群（Foreign Group）が設定され、これは琉球列島の島という地理的特徴により生じるものである。なおこの点こそ石器石材研究の対象地域としての該地がもつ好条件でもある。これには黒曜石・ヒスイなどが当てはまる。次に W 群（Wide Group）で、これは沖縄本島と近隣の離島で得られるが遺跡遠方でなおかつ産地が局地的なものとして設定した。W 群は緑色岩系・斑レイ岩・頁岩・安山岩・グリーントフ・チャートなどが代表的である。そして N 群（Near Group）は遺跡近隣で広域に分布する、砂岩・泥岩・石灰岩などが主な例となる。石質と産地の 2 大別を組み合わせ、WⅠ・WⅡ・WⅢ・・・というように分類した。

W 群を慶良間諸島・渡名喜島・久米島の石材とすると、アンチの上貝塚では FⅢ 2 点、FⅥ 1 点、WⅠ 2 点、WⅡ 42 点、WⅢ 2 点、WⅤ 1 点、WⅥ 4 点、NⅠ 56 点、NⅡ 74 点、NⅢ 298 点、NⅣ 822 点、NⅤ 329 点の内訳である（表 2）。表のように、最も多かったのは NⅣ で、剥片石器類の石材となるチャートである。このチャートには青白色と赤チャートの 2 種類がみられた。大多数を占める青白色チャートは、対岸の本部半島西岸の与那嶺層、その北にある伊是名島・伊平屋島に求められる。また赤チャートは瀬底島北西の伊江島で特徴的にみられる。いずれにしても比較的遺跡近隣から持ち込まれたとみられる。次いで多い NⅢ 群は、嘉陽層砂岩と古生代石灰岩が主体である。嘉陽層砂岩は中粒で青灰色が特徴で、近隣では恩納村から名護市にかけての海岸部で採集でき、敲石・磨石・石皿・砥石などの多彩なツールに無加工のまま用いられている。この石材は貝塚時代後期において上記の礫石器を中心に一部磨製石斧にも利用される、該期で主体となる石材である。一方古生代石灰岩は本部半島で容易に獲得できるが、硬質すぎるため剥離によって石器を製作するには困難な石材である。そのためかツールは 1 点のみであった。この石材が組成上多いのは全時代

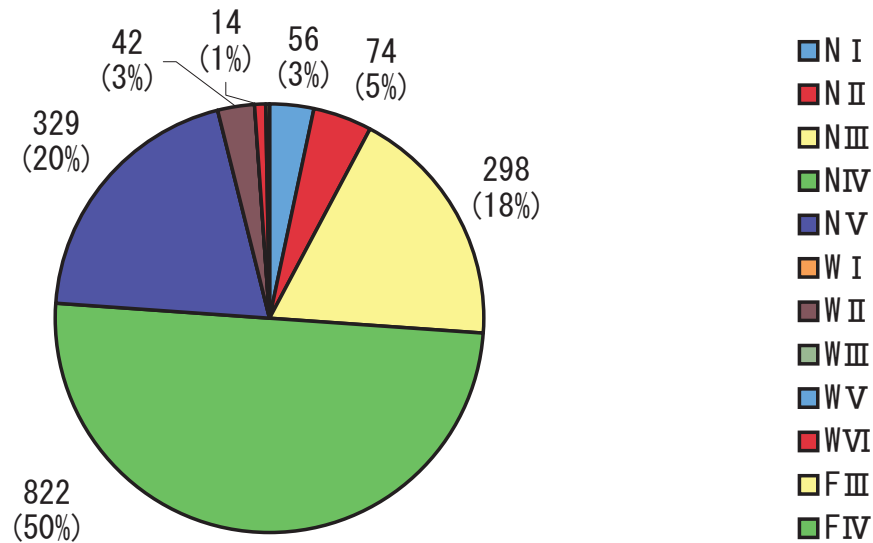


表2 第Ⅱ期調査出土石材の内訳

を通じてこの遺跡のみであるが、これは取り上げ方法の違いが反映されたものと思われる。また磨製石斧の石材に1点のみみられる変質安山岩も本部半島北岸・南岸で得ることができ、これも遺跡近隣で獲得することが可能である。N Iの緑色岩・輝緑岩・緑色片岩といった緑色岩系は、遺跡近隣では本部半島西岸の與那嶺層で産出する。先史を通じて磨製石斧石材として重用される石材である。この遺跡でも磨製石斧と敲石に使われるが、磨製石斧の研磨は部分的で原石形状を留めるなど、準粗製というべき製品である。さらにツール以外の石材は小形で石器に加工するには厳しいものであった。このようにツールの石材はいずれも遺跡近隣で獲得できる石材が用いられている。古生代石灰岩を例外とすると、石質Ⅲが後述する石質Ⅰに優越し、簡易的な石器製作を行われるなど、貝塚時代後期の特徴通りといえる。

一方でツールに加工されていない石材の中には遺跡遠方の石材であるW群やF群がみられる。WⅥ結晶質石灰岩・WⅢホムンフェルスは渡名喜島、WⅡ片状砂岩は慶良間諸島、WⅠ流紋岩・WⅠ輝緑凝灰岩・WⅣグリーンタフ・WⅤ凝灰岩は久米島に原産地がほぼ特定されている。さらに琉球列島には産しないF群には、琉球列島のものと石質の異なる安山岩（FⅢ）や佐賀県松浦原産と推定される玄武岩質溶岩（FⅢ）の粗割礫も認められた。これまでF群の石材は、縄文時代後期後半から晩期にかけてFⅣの主に腰岳産黒曜石が原石ないし粗加工状態で琉球列島に搬入することが知られるが（小田 2000、小畑 2005）、貝塚時代後期には磨製石鏃や方形片刃石斧などが成品搬入される事例のみであった。F群石材の搬入については再考の余地があるといえよう。しかし本来貴重であるはずのF群石材に対しても、N群と同様に粗割で廃棄されている。

神谷厚昭氏の指摘や既存の地質図、岩石図鑑を参考に遺跡出土石材の産地を調べていくと（木崎編 1985、神谷 1985）、当時アンチの上貝塚に集った人々には上記にあるような広域に分布する石材を集め、その中からツールに適した石材を選択していたことを窺わせる（図4）。さて、具体的に石材はどのように吟味されていたのだろうか。この答えと思われる情報もこの遺跡には「包含」していた。遺跡出土の石材は、上述したようにチャートが最も多く、次いで砂岩、古生代石灰岩とランキングされる。しかしツールに使用されるチャート・砂岩に対して、古生代石灰岩は何故か多量に本部半島から搬入しながらツールに用いられないのである。この疑問は石器に加工されなかった礫に答えが隠されていた。ツール以外の礫を1点ずつ観察していった結果、チャートもツールや石核、剥片まで加工されているのは節理面の少ない良質のチャートであり、それ以外の802点中703点のほとんどが節理割れを起こしているものや、多くの節理面をもつ

ている岩石で、原礫もしくは粗割で廃棄されていることが理解された。2日間のみの試験的な接合作業において3点の粗割同士の接合資料が得られているが、やはり節理面が多く節理割れを起こしていた（写真3）。これら接合資料からも粗割が遺跡内でも行われ、ツールまで加工されない石材が粗悪な石質であることを支持している。この粗割の仕方や原石形状は古生代石灰岩も近い状態であった。またチャートと古生代石灰岩の中には肉眼観察では判別の難しいものもあり、今日でも希塩酸によって識別されている。この状況を踏まえると、チャートと古生代石灰岩とは区別されることなく搬入され、遺跡内での試し割りを通じて良材が吟味されていたと想定される。チャートの場合はフレイクの出土数が少ないことからみて、良材は消費地において製品に加工されていたと推定される。チャートと古生代石灰岩だけでなく、第1次調査を含めてアンチの上貝塚ではほぼ全ての種類の岩石において粗割が認められる。アンチの上貝塚では石器石材の選択において非破壊では良悪が判断できない場合、試し割りを行うことで選別が行われていたと考えられる。彼らは肉眼的な判別だけでなく、試し割りも含めた五感全てとこれまで石器製作を行ってきた経験則とを総合して石材選択を行っていたのである。

## 5. アンチの上貝塚の景観とその変化

アンチの上貝塚の石器群・石器石材の特徴は理解された。これを踏まえてアンチの上貝塚の往時の景観について考えてみたい。

この遺跡に人間の痕跡がみられはじめる縄文時代後期頃は、この場所が貝塚時代後期前半に活性化するような社会的・経済的特性は有しておらず、遺物の出土状況からみて偶発的なキャンピングサイトであったとみられる。この時代背景を石器石材からみると、縄文時代後期から晩期は剥片石器石材として好まれるチャートや磨製石斧石材として好まれる緑色岩といった産地が限定的な石材であっても、沖縄本島諸島全体で大量に行き渡る時期であったとみられる。これら石材は原石搬入も多く、また原産地付近と消費地の遺跡で量的差異が認められないことから直接搬入の可能性が高い。また晩期には高嶺遺跡や仲原遺跡に代表されるような典型的な拠点集落の様相をもった遺跡も出現する。拠点集落には黒曜石や糸魚川産の翡翠製品も出土するなど富の集中する様相が認められる。アンチの上貝塚には縄文時代晩期の営為は全く認められないが、その背景には晩期においては拠点間での物流が中心で、交易の特化した場所を必要としなかったことが大きいと考えられる。

詳細な報告書が刊行されているので敢えてこの遺跡が交易拠点として考えられる詳細な根拠を述べないが、沖縄本島諸島が尖底土器を用い始める貝塚時代後期前半期、特に浜屋原式土器段階にアンチの上貝塚は交易に特化した場所として活性化する。大量のチャートからみてこの場所に本部半島周辺に生業範囲をもつ集団が主催者と考えられる。そこに名護・恩納村東岸部、久米島、慶良間諸島・渡名喜島といった沖縄本島諸島の他地域の集団が各々の生業範囲で得られる資源を手を訪れていたとみられる。

この目的は沖縄本島諸島の集団間での交易もあったと思われるが、それ以上に九州島あるいはその中継を担う者たちが携えてくる異邦の品々であった。これらは品定めが行われ、気に入った品々が各々の集落へと持ち出されていったのである。アンチの上貝塚の場合、交易の行われるその幾日かの間の短期的な居住のために食料や道具が持ち込まれ、その残滓や破損してしまった道具、試し割りの残滓や売れ残り、剥片剥離後の石核などがフィッシャー内に片づけられていった。島内ではみられない魚骨やイノシシ骨、石材、碧玉製管玉の小貝塚内からの出土はこの痕跡であるとみられる。この廃棄行為が何度かの交易活動によって累積していくことで、8基のフィッシャーは次第に小貝塚を形成するに至っている。場合によってはサンゴ礫で覆って隠しているが、これは見てくれの問題なのか、何らかの習俗的な行為なのか判断する術をもたない。

その後アンチの上貝塚は、大当原式土器の頃から翳りがみえ始め、くびれ平底土器が主体となっていく貝



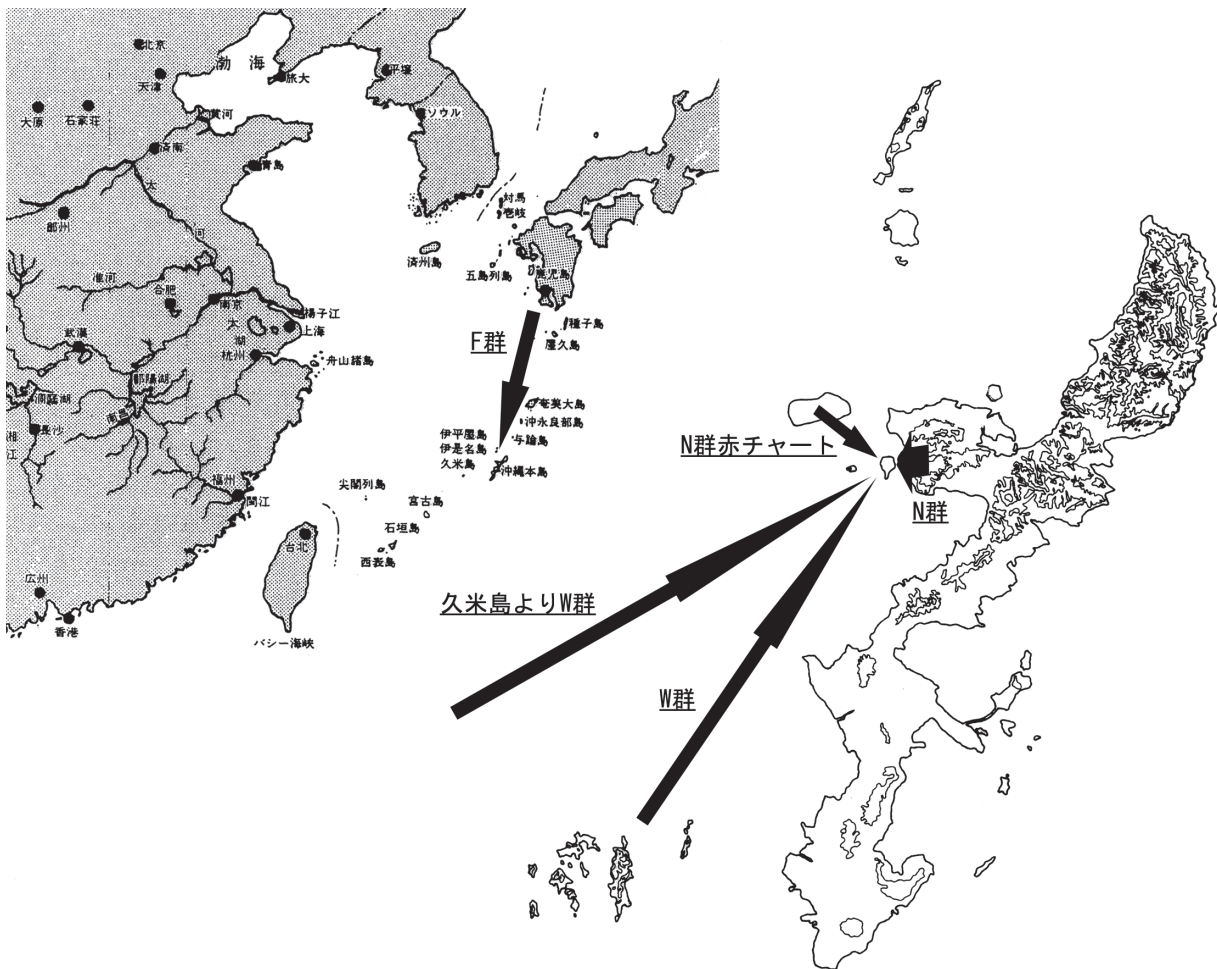


図4 石器石材の供給元



写真3 チャートにみる石質による消費の違い

左上：石核 左下：フリク 右：接合された円礫の粗割片

塚時代後期後半には人間の痕跡が全くみられない状況へと変貌していく。この場所を舞台とした 3000 年間の様々な変化を、現状の考古学的痕跡からは僅か 4 段階の変遷でしか辿ることが叶わない。しかしこの大まかなアンチの上貝塚の盛衰の過程は、やはり南島産貝交易を抜きにしては考え難い。遺跡の主体が浜屋原式土器段階という限られた時期というのは示唆的である。他方この時期の石器・石器石材からみると、縄文時代晩期に対して打製石鏃製作とそれに伴う黒曜石搬入の途絶、磨製石斧は点数が減る上に選択石材に在地や敲石磨石類石材が増加や作業工程も省略が多くなるなど、石器製作は粗製が主体化する（大堀 2006、2009）。このような石材選択の変化は、石材獲得行動が縮小されたことや地域集団間での領域意識が強化されることによって安定的な石材確保ができなくなったことなどが要因と考えられる。アンチの上貝塚において認められる石材の大量搬入は、石材の直接搬入が厳しくなったことを受け、石器に良好な沖縄本島諸島内の特定産地の石材が、価値ある商品として交易システム上に加わったことを示唆しているのではないだろうか。アンチの上貝塚は南島産貝交易とともに石材交易の場としての機能も停止することになるが、これは沖縄本島諸島内での物流ネットワークと南島産貝交易とが同じ物流上の俎上にあったことを窺わせる。また該期にはアンチの上貝塚の所在する瀬底島以外にも、伊江島・伊是名島・久米島など沖縄本島諸島の離島に所在する遺跡に九州弥生文化に由来する品々が出土する傾向にある。これら遺跡はその遺構・遺物の包含する全域を発掘調査されたわけではないので、その評価が新里の述べる拠点集落であるか交易拠点であるか評価し得ない。しかしこのような該期における離島遺跡の特徴からみて、東シナ海側の離島という景観が九州・琉球列島内を貫く物流ネットワークに対して大きな役割を果たしていたと考えられる。

アンチの上貝塚は貝塚時代後期後半になると全く人間の痕跡がみられなくなる。この状況はアンチの上貝塚に限らず、沖縄本島諸島の東シナ海側にある離島は久米島のみを例外にいずれも同じ状況になっている。この時期には土器様式が沖縄本島諸島様式の尖底から奄美諸島様式のくびれ平底へと変化するが、この大きな変化の背景には、高梨修が論じるように南島産貝交易の終焉と奄美諸島を中心としたヤコウガイ交易への転換という、琉球列島内での社会状況の変化の中に求められよう（高梨 2005）。

## 5. おわりに

アンチの上貝塚は、南島産貝交易を背景に離島という景観において繁栄した、交易活動に特化した場と評価される。本稿のような取り組みに対しては、実証的な立場から言えば机上の空論と一蹴されるかも知れない。しかしながらそれは筆者の力量に問題である。現場を調査し、整理して報告するまでは行政内研究者が担っている。その中で、遺跡のもつ特徴を少しでも多く引き出すための方法論的な模索と、その成果に基づいた遺跡の評価やそこにおける人間の営みを論じていくことは調査担当者の目指すべき目標ではないだろうか。本稿はその実験的な試みである。至らぬ点も多いと思われるが、多くのご意見が頂ければ幸いである。

（おおほり こうへい：調査班 専門員）

なお、本稿は 2009 年 10 月日本人類学会において発表した内容を加筆・修正したものである。当センター片桐千亜紀氏には第Ⅱ期調査報告に参加させて頂き、整理・分析作業から発表までご指導を頂きました。石畳研究所の神谷厚昭氏には石材の同定をはじめ観察方法や産地についてご指導を頂きました。浦添市教育委員会の菅原宏史氏とは何度も遺跡の評価について意見交換を行うことで、構想を固めていくことが出来ました。琉球大学医学部土肥直美先生には、ご指導頂くだけでなく日本人類学会での発表の機会も賜りました。この場を借りてお礼申し上げます。また作業を一緒に行ってくれた当センター文化財調査嘱託員の瑞慶覧長順氏、初めてだらけの整理作業を遺漏なくこなしてくれた整理作業チーム一同にもこの場を借りてお礼申し上げます。

## 注

- 1) もっとも、これら分類のうち半割と粗割を分ける有効性は大きく得られなかったため、混合してもよいと考えられる。
- 2) この接合作業は土器などでも行われる所謂破損接合のことではなく、剥離面同士を接合する作業を指す。この接合作業は、国内では埼玉県砂川遺跡を嚆矢に、北海道白滝遺跡群などで石器製作工程の復元や、場の機能の復元に大きな成果を上げている。
- 3) この石材の分類案は、2008 年 8 月の沖縄考古学会定例会において発表したものである。そのためテーマとした磨製石斧に重点を置いた順番となっている。これを石器全体に反映させた分類を用意することが今後の課題である。

## 参考文献

- 小田静夫 2000.10「沖縄の剥片石器についてーチャート・黒曜石製細小石器を中心にー」『琉球・東アジアの人と文化（上巻）』p55－77 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
- 大堀皓平 2006.6「先史沖縄人の在地性ー縄文時代後晩期から弥生時代中期併行段階における石器石材ー」『南島考古』第 25 号 p1-10 沖縄考古学会
- 大堀皓平 2008.3「先史沖縄島の磨製石斧製作ー「粗造の感」の石斧についてー」『國學院大學大學院紀要ー文学研究科ー』第 39 輯 p265－278 國學院大學大學院
- 片桐千亜紀・西銘章・山田浩久・菅原広史・大堀皓平・黒住耐二・樋泉岳二編 2009.3『瀬底島・アンチの上貝塚ー個人住宅建設に伴う緊急発掘調査報告ー』本部町文化財調査報告書第 9 集 本部町教育委員会
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1991.3『図録石器入門事典 先土器』柏書房
- 加藤祐三 1985.9『奄美・沖縄 岩石・鉱物図鑑』新星図書出版
- 木崎甲子郎編 1985.9『琉球孤の地質誌』沖縄タイムス社
- 新里貴之 2001.6「物流ネットワークの一側面ー南西諸島の弥生系遺物を素材としてー」『南島考古』第 20 号 p49－66 沖縄考古学会
- 新里貴之 2003.3「貝塚時代後期石器研究への予察ー久米島ウルル貝塚採集石器を素材としてー」『久米島自然文化センター紀要』第 3 号 p1－11 久米島自然文化センター
- 高梨修 2005.5『ヤコウガイの考古学』ものが語る歴史 10 同成社
- 田中英司 2004.9『石器実測法 情報を描く技術』雄山閣
- 盛本勲・安座間充ほか編 2005.3『瀬底島・アンチの上貝塚発掘調査報告書』本部町文化財調査報告書第 8 集 本部町教育委員会

(2010 年 3 月上梓)